|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 分野名 | 会計分野（財務会計Ⅰ） | |
| 教科書 | 高校財務会計Ⅰ（実教出版） | |
| 単元 | 章 | 第９章　固定資産（その４　無形固定資産） |
| 節 | 第２節　無形固定資産の取得原価 |
| 教材の  タイトル | 無形固定資産（のれん償却） | |
| 教材からの学び | １　のれんについての理解を深め、会計的側面から企業を分析する力を養う。  ２　日本会計基準と国際会計基準での「のれん」の会計処理の違いについて多面的に理解する。  ３　会計処理の違いから発生する利益額の違いについて理解するとともに、国際会計基準を採用している企業の特徴について理解する。 | |
| 時間数 | ２時間 | |
| 授業の  進め方 | ＜無形固定資産（のれん償却）＞  １　ワークシートを配付し、無形固定資産の意味と種類について講義を行う。その中でも特にのれんの計上方法について詳しく説明を行う。また、サッカークラブでは選手登録権が無形固定資産として計上されることにも触れる。（20分）  ２　ケースメソッドを配付し、事前アサインメントに取り組ませる。（30分）  　　ＩＦＲＳ（国際会計基準）と日本会計基準ののれん償却の違いを考えさせるように授業を進めていく。減損損失は日商簿記１級の範囲であるが、日本会計基準と国際会計基準の違いを説明する上では必須の知識なので、発展した学習ではあるが、減損損失について資料を用いて説明する。  ３　ケースメソッドを実施し、グループ（10分）と全体（40分）で意見共有を行う。その後、振り返りシートの記入をさせる。  アサインメント５についてはさまざまな考え方から多面的・多角的に判断するので、グループで最終の意思決定を議論させると学習効果が上がる。 | |

無形固定資産（のれん償却）　授業計画

■本時の位置付け

第９章　固定資産（その４　無形固定資産）

第２節　無形固定資産の取得原価

■本時の目標

１時間目

無形固定資産の種類と意味を理解し、のれんについての興味関心を深める。

２時間目

のれんについてのケースメソッドを実施し、日本会計基準と国際会計基準での「のれん」の会計処理の違いについて多面的に理解するとともに、主体的に問題解決に取り組む態度を養う。

■評価の規準

【Ａ】知識・技術

・のれんの会計処理に関する基礎的な知識を身に付けている。

・日本会計基準と国際会計基準ののれんの償却方法の違いを理解している。

【Ｂ】思考力・判断力・表現力

・日本会計基準と国際会計基準ののれんの扱いについて多面的に理解し、さまざまな角度からのれんについて探究し、自らの意思決定を行うことができる。

【Ｃ】主体的に学習に取り組む態度

　・事前アサインメントの取組状況。

　・課題解決に対して、主体的に解決しようとしている。

・ケースメソッドにおいて、グループ内で積極的に発言している。

■留意事項

　・ケースメソッドが円滑に進むように、適宜教員から指導・助言を行う。

**【無形固定資産（のれん）償却：基礎学習】**

**＜のれんとは？＞**

**法律上認められた権利ではないが、優秀な技術や有利な立地条件あるいは知名度などによって、その企業が他の（　①　　　　　　　　　）に比べて有利な立場にあり、より多くの収益を上げている場合に、その**

**（②　　　　　　　　　　　）の原因となるものをいう。**

**のれんは、事業の譲り受けまたは（　③　　　　　　）などによって取得した場合にかぎって、（　④　　　　　　）に計上することができる。**

**■のれんの償却**

**のれんは、その取得後（　⑤　　　　年　）以内その効果のおよぶ期間にわたって（　⑥　　　　　　）などの方法により規則的に償却する。**

**＜参　考＞**

**■のれんの減損（財務会計Ⅱの範囲）**

**M＆A（企業の合併＆買収）をした際の投資額が予定通り回収できそうにないときに、のれんの帳簿価額を回収できる額まで切り下げる必要がある。その時に発生する損失を「減損損失」という。**

**【例】M＆A（企業の合併＆買収）によって企業を買収した際に、５億円をのれんとして計上していたが、経営難によって今後、３億円しか回収できそうにない場合、**

**＜計算式＞**

**のれんの帳簿価額５億円　－　今後回収できると見込まれる価値３億円　＝　２億円（減損損失）**

**※減損は損益計算書上の特別損失に計上する。よって、減損の額は企業利益に大きく影響する。**

**■IFRS（国際会計基準）**

**IFRS（国際会計基準）ではのれんは償却しない。ただし、減損しているのか、していないのかを測定する減損テストが行われ、将来回収できる価値が低下している場合は減損処理を行い、その損失は（減損損失）損益計算書の特別損失に計上する。一方で、日本会計基準では、のれんは20年で規則的に償却するとしている。**

**＜参考資料＞**

**ワールドカップの前に・・サッカー選手の価値は決算書に載る！？**

**2017年12月9日**

**イタリアの名選手、値がつかず**

**サッカークラブにとって、選手は最大の財産といえます。では、クラブの経営状態を表す財務諸表で、選手の価値がどのように表現されているかご存知でしょうか。実は、一般企業と同じように、クラブが抱える資産と負債の額は貸借対照表（バランスシート）で記されます。ユースからそのままトップチームに昇格してプレーしている選手の場合、実は貸借対照表には何も計上されていません。その選手の「金額」がまだ決まっていないからです。しかし、他のクラブから獲得した選手の場合は違います。相手クラブに支払った移籍金の額が資産として計上され、契約年数によって減価償却されていきます。パソコンや機械設備など、一般企業の設備と同じ具合です。会計基準は国やクラブによっても異なりますが、欧州ではこの方法が主流だそうです。イタリア1部リーグ（セリアＡ）のＡCミランで４０歳までプレーしたパオロ・マルディーニという選手がいます。セリエＡの史上最多出場６７４試合という金字塔を打ち立てた名選手ですが、ユースから引退までミラン一筋だったため、会計上は生涯、値段がつかないままでした。**

**英国プロサッカークラブにみる移籍金と契約金の会計処理**

**世界に名だたるビッククラブが存在する国は、イタリアだけではありません。現在も日本代表の各選手がクラブチームで活躍していますが、英国にもビッククラブが存在します。では、この英国におけるクラブチームでは、選手の移籍金や契約金に関して、どのような会計処理がなされているでしょうか。まず、欧州では、移籍金は選手自身の売買ではなく、「選手登録権」の売買と考えられています。そして、英国における、この選手登録権の会計処理方法は、選手登録権の獲得に関連して支出したコストは無形固定資産として計上され、支出金額は定額法で、それぞれの選手の契約期間に渡って全額償却されます。また、選手登録権は帳簿価額が使用または売却を通じて回収可能な額を超過している場合には、減損処理されます。では、契約金の会計処理はどのようになるのでしょうか。移籍金と契約金とでは、移籍金が他のプロサッカークラブに所属する選手の選手登録権を獲得する際の対価として、取引相手に対して支出した金額であるのに対し、契約金は一般的にプロサッカークラブが選手と契約する際に、選手に対して支出した金額という点で異なります。このような違いにより、契約金については、移籍金とは異なり、営業費用の一部として、選手の契約期間に渡り損益計算書に均等計上されたり（期間均等分割計上法〜チェルシー等が採用）、契約日に一括して費用計上される（一括計上法〜アーセナル等が採用）方法が採られています。**

説明文出典：株式会社Ｍ-Cass

https://m-cass.co.jp/blog/c01/25/

【ケースメソッド】

のれんの償却方法が日本会計基準とIFRS（国際会計基準）とで違うってホント？？

ABC商事は、国内で事業を展開する中小企業です。今後、ABC商事は成長戦略の一環として、ABC商事は多くの企業を買収し、経営の多角化を行っていく予定です。買収先は国内企業、海外の企業を問わず買収をしていく計画です。経理部の中堅社員である田中さんは、ある日、社長の佐藤に呼ばれました。ABC商事が今後、企業の買収を進めていくにあたり、会計基準を現在の日本会計基準から※１IFRS（国際会計基準）に変更すべきか悩んでいるとの相談を受けました。そして、日本会計基準とIFRSの「のれん」の処理方法とその影響について調べてほしいと言われました。田中さんは大きな仕事を任されたことに喜びを感じ、早速動き始めました。

日本の多くの企業が採用している会計のルールである日本会計基準では、のれんを20年以内で定額償却しますが、IFRS（国際会計基準）ではのれんを償却せず、価値が下がった場合にのみ※2減損損失を計上します。田中さんは、この違いが企業の財務諸表にどのような影響を与えるかを考え始めました。

先ほどの話でもあったとおり、ABC商事はIFRSの採用を検討していますが、まだ決定には至っていません。日本の上場企業は2025年１月現在、約3,900社あります。日本ではIFRSの採用が可能になってから約15年経ちますが上場企業の約７％である278社しかIFRSを採用していません。田中さんは、なぜ日本企業がIFRSに対して消極的なのか、そしてIFRSを採用する企業が企業買収を積極的に行っている理由についても調査を始めました。

|  |
| --- |
| ※１IFRS（国際会計基準）とは  IFRS（国際会計基準）とは、世界中の企業が使う共通の会計ルールのことです。これを使うことで、どの国の企業でも同じ基準で財務報告を行うことができ、企業の財務状況を国際的に比較しやすくなります。 |

|  |
| --- |
| ※2減損損失とは（日商簿記１級の内容）  減損損失とは、企業が持っている資産（例えば建物や機械など）の価値が大きく下がったときに、その価値の下がり具合を会計上で反映することです。  ＜減損損失の例＞  例えば、企業が所有するビルの価値（例：帳簿価額５億円）が、経済状況の変化や市場の動向によって大幅に下がった（例：回収可能価額３億円）とします。この場合、企業はそのビルの価値を見直し、実際の価値に合わせて帳簿上の金額を減らします。この減らした金額が「減損損失」となります。  例：帳簿価額５億円　－　回収可能価額３億円　＝　減損損失２億円（特別損失として計上）  ＜減損損失の目的＞  減損損失を計上することで、企業の財務状況をより正確に反映することができます。これにより、投資家や取引先は企業の実際の状況を正しく理解することができ、信頼性が高まります。 |

【アサインメント】

１．日本会計基準とIFRSののれんの処理方法の違いを簡単に説明してください。

２．のれんの処理方法の違いが企業の利益に与える影響を考えてください。

３．なぜ日本企業はIFRSの採用に対して消極的なのでしょうか？その理由を考えてください。

４．IFRSを採用する企業が企業買収を積極的に行っている理由について考えてください。

５．経理部の田中さんの調査から、ABC商事はIFRSを採用したほうがいいですか。あなたがABC商事の佐藤社長であればどちらに意思決定をしますか。また、その理由を考えてください。

　　　私が社長であればIFRSを採用（　　する　　・　しない　　）←どちらかに〇を付ける。

＜その理由＞

　　　年　　　　組　　　　番　　氏名

＜振り返りシート＞

１　事前課題にはしっかりと取り組むことができたか。

できた　　　　まあできた　　　　あまりできなかった　　　　できなかった

２　グループ学習では全体を見ながらはっきりと話すことができたか。

できた　　　　　まあできた　　　　あまりできなかった　　　　できなかった

３　グループ学習では他人の意見をしっかりと聞くことができたか。

できた　　　　まあできた　　　　あまりできなかった　　　　できなかった

４　他の人の発表を聞いて、参考になったことや新たな気付き。

５　のれん償却について学んだこと。

　年　　　　組　　　　番　　氏名

**これより教師用参考資料**

**【無形固定資産（のれん）償却：基礎学習】**

**＜のれんとは？＞**

**法律上認められた権利ではないが、優秀な技術や有利な立地条件あるいは知名度などによって、その企業が他の（　①同種企業　）に比べて有利な立場にあり、より多くの収益を上げている場合に、その**

**（②超過収益力）の原因となるものをいう。**

**のれんは、事業の譲り受けまたは（　③合併　）などによって取得した場合にかぎって、（　④資産　）に計上することができる。**

**■のれんの償却**

**のれんは、その取得後（　⑤２０年　）以内その効果のおよぶ期間にわたって（　⑥定額法　）などの方法により規則的に償却する。**

**＜参　考＞**

**■のれんの減損（財務会計Ⅱの範囲）**

**M＆A（企業の合併＆買収）をした際の投資額が予定通り回収できそうにないときに、のれんの帳簿価額を回収できる額まで切り下げる必要がある。その時に発生する損失を「減損損失」という。**

**【例】M＆A（企業の合併＆買収）によって企業を買収した際に、５億円をのれんとして計上していたが、経営難によって今後、３億円しか回収できそうにない場合、**

**＜計算式＞**

**のれんの帳簿価額５億円　－　今後回収できると見込まれる価値３億円　＝　２億円（減損損失）**

**※減損は損益計算書上の特別損失に計上する。よって、減損の額は企業利益に大きく影響する。**

**■IFRS（国際会計基準）**

**IFRS（国際会計基準）ではのれんは償却しない。ただし、減損しているのか、していないのかを測定する減損テストが行われ、そこで将来回収できる価値が低下している場合は減損処理を行い、その損失は（減損損失）損益計算書の特別損失に計上する。一方で、日本会計基準では、のれんは20年で規則的に償却するとしている。**

【アサインメントの模範解答】

１．日本会計基準とIFRSののれんの処理方法の違いを簡単に説明してください。

日本会計基準では、のれんを20年以内で定額償却します。

IFRSはのれんを定額償却せず、価値が下がった場合にのみ減損損失を計上します。

２．のれんの処理方法の違いが企業の利益に与える影響を考えてください。

日本会計基準では毎年一定額の償却費用が発生するため、利益が安定して計上されます。

IFRSでは減損損失が発生する場合、一度に大きな損失が計上される可能性があり、利益が大きく変動することがあります。また、毎年「のれん償却」という費用が発生しないので、利益を大きく見せることができます。

３．なぜ日本企業はIFRSの採用に対して消極的なのでしょうか？その理由を考えてください。

・コストと労力の増加: IFRSの導入には、企業の内部統制やシステムの変更が必要となり、これに伴うコストや労力が大きいです。特に中小企業にとっては、これらの負担が大きな障壁となります。

・複雑な基準と頻繁な変更: IFRSは複雑な基準を持ち、頻繁に変更されることがあります。これに対応するためには、専門知識を持つ人材の確保や継続的な教育が必要となり、企業にとって大きな負担となります。

・文化的・商習慣の違い: 日本の会計基準は、日本の経済や商習慣に基づいています。IFRSは国際的な基準であり、日本の文化や商習慣と異なる部分が多いため、導入に対する抵抗感があります。

・既存の会計基準への満足: 多くの日本企業は、現在の日本会計基準に満足しており、特に大きな問題を感じていません。そのため、新たな基準を導入する必要性を感じていない企業も多いです。

４．IFRSを採用する企業が企業買収を積極的に行っている理由について考えてください。

・国際的な比較可能性の向上: IFRSを採用することで、企業の財務情報が国際的に比較しやすくなります。これにより、海外の投資家や取引先からの信頼を得やすくなり、企業買収の際にも相手企業に対して財務状況を明確に示すことができます。

・資金調達の容易化: IFRSを適用することで、海外の投資家からの資金調達がしやすくなります。国際的に認知された基準を使用することで、投資家にとって財務情報が理解しやすくなり、資金調達のプロセスがスムーズに進むためです。

・のれんの償却が不要: IFRSではのれんの償却が不要であり、価値が下がった場合にのみ減損損失を計上します。これにより、企業買収後の財務負担が軽減され、利益の変動が少なくなります。

５．経理部の田中さんの調査からABC商事はIFRSを採用したほうがいいですか。あなたがABC商事の佐藤社長であればどちらに意思決定をしますか。また、その理由を考えてください。

　　　私が社長であればIFRSを採用（　　する　　・　しない　　）←どちらかに〇を付ける。

＜その理由＞